

# 九州朝陽会報

平成二十三年七月一日発行第十五号

## 連載「新宿の思ひ出」

### 第五回「焦土に立つて」

朝陽同窓会顧問・九州朝陽会名誉会員

佐藤 喜一（新1回）

時代が違うんだよね、と言われそうだけれど、しばしアナログ翁の話にもつきあってください。

その頃、こんな「唄」がうたわれはじめていた。「星の流れに、身を占って、どこをねぐらの今日の宿……」ものうい声で菊池章子がうたい、その哀切感が若いぼくたちの心にも沁み

た。新宿のまちは焼けただれてはいたが、六中の建物は老朽化しつつも残っていた。昭和二二年頃だったろうか。時間表どおりに授業はあったが、教室の窓ガラスはない。ストーヴはあっても燃やすものはない。よれよれのコートを着たまま、飢えと寒さに耐えて授業を受けた。部活なども了えて夕方校門を出ると、その前にはどこからともなく妖しげな女たちがたむろしてきていた。

その頃、あの伊勢丹は駐留軍兵士たちの宿舎。宵闇せまる頃ともなると、兵士たちも集まってきた。そして、連

れだっでは消えて行く……。ラヴホテルなどない時代だった。夜の校舎は格好の場所だったようだ。特に体育館のマットなどは、良き施設だったようだ。朝になると残骸と思われるものが散乱していた。

プールはあったが水不足で戦後は入ったことがない。汚水桶のような状態でも、夏ともなると風呂がわりに近所の住人や、G-1たちが水浴びをしていたようだ。私たちは水泳禁止！病気になるゾと脅かされた。そんな中でも六中健児はけなげに生きた。



旧初代校舎屋上より伊勢丹・帝都座方向を見る(朝陽NO.28表紙より) 藤田忠夫氏(新3回)スケッチ

でも、私たち健児にはあの漱石が「三四郎」の中で広田先生に言わせた「\*亡びるね」のひと言が、ズッシリと響いた。背の高いG-1(駐留軍兵士)にぶら下がるようにして去る女たちの姿を見ると、「こんなニホンに誰がした……」とうなつた。

八月一五日は『終戦の日』だ。たしかに戦の終わった日ではある。しかし、正しくは戦に負けた日ではないのか。『敗戦の日』なのだ。

新宿高校の学校行事に戸山高戦と

いうイベントがある。生徒たちは燃える。窓からこんな垂れ幕が下りたことがあった。臥薪嘗胆(ガシンショウウタン)！『昨日の敵は今日の友』もいいことばだが、この四文字熟語もゆめ忘れることなかれ！

脚注\*

日露戦争戦勝で一等国を自認するが、西洋人にたいする打ち消しがたき劣等感

(2011.1.26 寄稿)

## 自然災害と人災

株式会社朝陽 相談役

豊田信夫(新7回)

東日本大震災に追い打ちをかけた福島第一原発事故の複合災害に遭遇していろいろな想いが駆け巡る。

石油の発見は人類に幸せをもたらしたが、それがもろ刃の剣となって静かに進む地球温暖化と自然環境破壊が将来人類を幸せの絶頂から不幸のどん底に突き落とすかもしれない。原子力も途方もないエネルギーで人類を幸せにするが、一方もろ刃の剣で人類に途方もない不幸をもたらしている。

そもそも原子力は神の領域で人類が踏み込んではいけない分野かもしれない。人類の欲望の肥大化は遂に開けてはいけないパンドラの箱を開けた為に、広島、長崎の悲劇、チェルノブイリ原発事故、米スリーマイルアイランド原発事故、そして福島第一原発事故が続くのではなからうか。

東京電力は事故を「想定外」と弁解するが原発事故に「想定外」はあってはならない。「人災」であったことを認識して災害対策が甘かったことを認めるべきだ。今回は15メートルの津波にやられたが、20メートル、30メートルの津波は日本の津波歴史に実在する。外国の原子力専門機関や国内の原子力専門家から、過去に再三「津波対策が甘いので福島第一原発は危ない」と警告を受けてきたにも拘わらず東電と国は無視してきた。原発政策やビジネスの論理に危険性への警告がかき消された面はないのか。東電も国も長期に亘って政権を担ってきた自民党も責任は重大である。

原発は国内発電量の29%を賄っていると言うが、29%の電力がないと日本人は生きていけないのだろうか。世の中あまりにも便利になり過ぎて、不必要な便利さに神経が麻痺してはいないか。エネルギーを食らう便利さは何でもあればいいと言うものではない。東京都の石原知事が日本中に散在する自動販売機は節電のためには不要だと言ったが、極論にしても傾聴に値すると思う。昭和四十年代初頭は自販機は一台もなかったが我々は何も困らなかつた。消費者のニーズの為にと言う手前勝手な言葉で便利さがどんどん蔓延している。

原発の発電コストは石炭や天然ガスの火力よりも安いと言う思想の上になり立っているが、とんでもないこと、破格な高コストだと言うことを電力会社は思い知ったことであろう。安

全対策に途方もない費用がかかるし、これを怠ってひとたび事故を起こせば対策費と補償費に天文学的な資金が必要になる。果たして人間は原子力を完全にコントロール出来るのかどうか自信を持って答えられる人は居ないのではないか。

東日本大震災と福島第一原発事故、この戦後最大の国難にどんな人が総理になっても満点なことは出来ないのではないか。菅総理も欠点は多々あり頼りないところがあるが一生懸命やっている。このような時に政権を担当したのが運が悪いのかいいのかわからないが、このような大國難では与党も野党もない。政治論争は一時棚上げして政治家は一致団結して一丸となってこの眼前の国難に対処すべきだ。統一地方選挙に勝利したことをいいことにして、野党第一党の谷垣自民党総裁も石原幹事長もこの期に及んでも政権批判に終始するのは政治家として情けない。小沢一郎とその支持勢力に至っては、与党の一員でありながら臆面もなく菅総理批判するのは何か言わんやである。このような政治家はさっさと政治の舞台から去るべきだ。

東日本大震災に迅速な対応を見せた自衛隊の活躍には頼りがいを感じるが、二万人にもぼる米軍の「オトモダチ作戦」には目を見張るものがあった。民主党政権が登場して鳩山首相が「アメリカとの関係を変える」と発言して以来、日米関係がギクシャクしている感があるが、今回の未曾有の大

災害で、日米安保の存在感と日中関係も大事だが日米関係はそれ以上に重要だと言うことを改めて考えさせられるいい機会になったと思う。

(2011.4.25 寄稿)

## 大震災と新幹線大動脈

元九州旅客鉄道 社長・会長

石井幸孝(新3回)

何の因果か、東日本大震災の翌日、九州新幹線鹿児島ルートが全通した。平成二三年三月一二日、長い年月の紆余曲折を経て、九州新幹線鹿児島ルートが全通した。これで九州の縦断約250キロの所要時間が三分の一に短縮され、また大阪・中国地方と九州中南部とが直結し、新しいビジネスや観光の流動が始まるだろう。また同時に、鹿児島から青森までが繋がり、近い将来に札幌までの新幹線・列島大動脈が完成する。東海道新幹線以来半世紀にわたる、壮大な国家投資を一杯有効に活用すべきである。

現在、新幹線は夜間(〇時〜六時)には全く使われていないが、夜間物流に活用することを真剣に検討すべきだ。長距離拠点間輸送の自動車から鉄道へのモーダルシフトを行う。物流の定時・速達化、省エネルギー、省力化、道路渋滞対策、温暖化ガス対策に大きな効果を発揮する。特に夜間余剰電力活用の効果は大きい。夜間の新鮮食材輸送にも活用する。大生産地(九州、北海道、東北)から大消費地(関西、

関東)へ輸送し、食料自給率向上にも資する。



新大阪～鹿児島中央間「みずほ」「さくら」に使用されているN700系車両

実は、新幹線夜間貨物の検討は、東海道新幹線計画・建設時になされ、実際に新幹線貨物ターミナルの用地買収や一部分岐線工事なども行われたが、工事途上で東海道新幹線貨物輸送は止めになった。その後も昭和四五年、新幹線夜間コンテナ輸送の検討をしたことがあるが、未だ延長キロも短く、当時の労働環境もあり見送られた経緯がある。

従来、新幹線夜間運行の問題点とされてきた点については、①騒音では、夜間物流新幹線は毎時200km以下の速度で十分であり、この程度では在来線(毎時130km)夜間運行より静かである。②夜間の線路保守では、拠点間なので、九州で言えば、深夜〇時頃は九州発(上り)のみ、早朝四時頃は九州着(下り)のみで、いわば単線でのよいし、夜間六時間のうち半分くらいの時間の保守間合いは取れるだろう。前記東海道新幹線計画時点での

貨物輸送では土曜日を貨物運休としていた。

九州、関西、関東、東北、北海道に、鉄道とアクセス輸送自動車とコンテナ積み替えターミナルをつくる。新幹線ルートに近い閑散地方空港の転用なども検討する。新幹線は国家的インフラであり、国の視点での鉄道・道路・空港の総合的投資としてとらえ、JR各社との調整が必要である。

長崎新幹線は武雄温泉〜諫早間が工事中で、武雄温泉以東は方針が決まっていない。フリーゲージが有力視されているが、技術的に実用の目処が立っていない。筑後船小屋から佐賀空港を経由して肥前山口まで新幹線で結ぶことを検討したらどうか。空港に隣接して大きな物流基地(ターミナル)を造り、上記物流新幹線のターミナルとする。佐賀空港を物流中心に活用し、空路・鉄道・道路の接続ターミナルとする。

佐賀空港滑走路は2000mだが、将来的には4000m×2本、二四時間空港とし、西日本のハブ空港にできる唯一のところである(博多まで新幹線なら二五分)。

残された長崎ルートは、東北の秋田新幹線、山形(新庄)新幹線で成功しているミニ新幹線方式(在来ルートのままで、線路だけを新幹線幅「標準軌」にして直通する方式)を採用し、横断線に有効。いわばフリーゲージを線路側で解決する方式を採用し、武雄温泉〜佐世保間もミニ新幹線にすれば、新大阪〜長崎間に加えて、新大阪〜佐世

保間、佐世保、長崎間も新幹線が走る。目を世界におけると、特にアジア地区の標準軌による高速鉄道網の計画は目を見張るものがある。韓国を中心にした日中韓海底トンネル **Asio Channel Tunnel** の議論も始まっている。中国の北京、上海間始め国内、さらには東南アジア諸国への南下複数ルート計画、韓国 KTX、台湾の高速鉄道、さらには鉄道による欧亜連絡ルート（「鉄道シルクロード」）の計画も前向きに進んでおり、海・空と並んで標準軌鉄道による経済版図を念頭に置いており、二十一世紀は新たな発想での大鉄道時代がやってくるという見方もある。米国での高速鉄道建設議論も貨物併用抜きではかみ合わない



だろう。

二十世紀は戦争と鉄道の深いかわりを経験してきたが、二十一世紀は戦争は回避されるものの、地球規模の有事、例えば自然災害・地球異変・広域環境汚染・人口爆発・食料飢饉・経済異常など容易に予測もコントロールもできない世界規模・超大型異常への「有事保障」に鉄道の体力維持は重要であろう。ハブ空港、ハブ港湾で近隣諸国に後れを取ったわが国は、新幹線生みの親でありながら、標準軌大動脈でも後れをとらないようにしたいものだ。今回の九州新幹線鹿児島ルート完成は、列島大動脈完成を意味する以上、その有効活用に関する国家的戦略の議論の契機になるかもしれない。

九州新幹線開業の前日、三月十一日に悲惨な東日本大震災が起こった。東北新幹線も四月二十九日関係者の懸命な努力で全線運転再開した。今後は復興に大きな力になるだろう。東北新幹線はほとんどが海回りを避けて通っている。明治時代の東北本線など主要幹線建設の議論では海上からの艦砲射撃などの攻撃を避けることだったが、津波にやられるとは思っていなかった。東海道新幹線の二重系化も議論すべきだろう。明治初年の中仙道か東海道かの議論が思い起こされる。

新幹線大動脈の夜間物流活用は有事対策にもなる。特に、今回は間に合わないにしても、このような場合の復興時、「広域・高速・大量・安定物流システム」として機能するだろう。夜

間余剰電力を活用して、昼間トラック輸送の石油燃料を節減し、火力発電にも回せる。物資輸送優先の場合には夜間貨物時間帯を広げればよい。戦中激戦時東海道・山陽本線の旅客列車削減・スピードダウンで貨物列車大増送を行ったことを思い起こす。

自然災害と隣り合わせという「この国のかたち」を考える時、しかもその影響が巨大化する今世紀には「災害と共存する力強い国づくり」を目指さなければいけない。今回の尊い犠牲を無にしてはいけない。当然ながら元に戻すだけの復興ではない。

**小坂弘治君への哀悼**

(2011.4.23 寄稿)

九州朝陽会 幹事長

**小泉純理(新7回)**

この二月一八日未明小坂弘治君が黄泉の国へ旅立った。その日私はいつものように深夜CSテレビの「歌舞伎チャンネル」を見ていた。

その日は役者の対談番組(鈴木治雄の「芸に生きる」)で尾上

九朗右衛門(六代目菊五郎の息子)、市川段四郎



(市川猿之助の弟)が登場した。予て

より戦時中の六代目のことなどの話が聞けるのではと、録画の準備も済ませ楽しみにしていた。それを見ていると、昔の帝国劇場の楽屋の話やら、小坂君の親しくしていた猿之助の近況などが語られた。その瞬間、私は彼が見たらさぞ懐かしく想い喜ぶだろうと、早速この録画を病床の彼に送ることを決めたのだ。

一月初旬に最後の書簡を送って以来音沙汰が無く、病の様子を尋ねるのも躊躇われ、電話も出来ずにいたので、これを送りがてら手紙をしたためることにした。その日は博多に出る予定だったので、早朝に起き録画をダビングし手紙を書いて家を出た。その途上、バスの中で携帯が鳴ったが、車中であり家からの電話でもあったので出ずにいた。天神でバスを降り、少しでも早く彼に送ろうと郵便局に急いだ。郵便を送り家に電話を入れたら、小坂君の訃報があったと知らされ驚いた。

気を取り直して、彼の自宅に電話をすると、奥さんから彼がその日の午前二時頃亡くなったと聞かされた。まさしくその時間、私はテレビを見ながら彼への想いを馳せていたのだ。

後日、葬儀の日とそのDVDは自宅に届き、彼の仏前に供えられたことを奥さんから知らされた。残念ながら彼の目にはふれなかつたものの、いろいろ世話になった彼へのささやかな謝恩になったかと自らを慰めている。

思えば彼は在校中、二年の時に同クラスだっただけで、お互い部活動も仲間も違い、交流は全くと言っていい

ほどなかった。唯、何故か再会した時、卒業後の交流も皆無であったにも拘らず、お互いの存在は記憶していたのが不思議でならない。確か平成十年秋に九州朝陽会が中洲「大阪屋」であり、そこでの出会いが、実に高校卒業以来、まさしく半世紀以上の歳月を経ての再会であった。

彼が東宝に勤務していたことは卒業名簿で知っていたものの、その時新たに開設される博多座の総支配人として既に活躍中で、博多でもかなりの著名人となっていて、それからの交流で、彼が高校時代から演劇を趣味とし、将来は役者を目指していたこと、そして役者にはならなかったものの東大在学中も演劇に関わり続け、東宝に入社しミュージカル、芝居などに深く携わってきたことを知った。

他方、私は土木技術者として建設業に入り、全国をトンネル、ダム、鉄道、道路など演劇とは程遠い世界を歩んできた。とは言うものの私は中学時代の恩師、兄貴分の従兄などの感化を受け、高校時代初めて創設された「都民劇場」に入り、学生時代は歌舞伎、ミュージカル、オペラなどに、乏しい懐をはたいて毎月足を運んでいた。しかし建設業に携わってからは、辺鄙な地方の工事現場勤務等多忙な日々、そんな世界とは無縁となってしまった。定年を過ぎ第二のサラリーマン人生を送るようになり、やっと多少の余裕ができ、出張で東京の折など時間を作っては、帝劇のミュージカルや歌舞伎

座を楽しむ機会が取れるようになってきた。しかしその第二の人生も終わりに近づき、いよいよ上京もままならぬようになっていた。そんな矢先、博多に四季劇場が開設され、更に博多座も開設されるようになったことは、我が余生はこれで趣味を楽しめると喜んでいった。そこに彼が博多座の支配人として赴任してきたことは、何よりも幸運を感じた。

やがて再会までのお互いの越し方の人生を語り合ううちに、共通の話題が歌舞伎、ミュージカルであり、それについて一方は興行者として、一方は観客として真摯に語り合える仲間となっていた。再会して間もない頃、未だ博多座がオープン前、彼が帝劇での初演に携わったミュージカル「レ・ミゼラブル」を博多座で是非興行して欲しいと願ったところ、それはとても無理だと一笑に付されたことがあった。しかし、それが平成十六年に実現され、レビュー公演に招待してくれたことがいまだに忘れられない。そして博多座オープン当初、彼から自分が支配人であるかぎり、博多座での歌舞伎公演は全て招待すると約束してくれ、常に席を二枚とってくれたことは何よりもありがたかった。その都度私は歌舞伎に興味を持ちそうな人を探しては同伴した。そのうちの幾人かはその後歌舞伎ファンとなり、博多座に通うようになったことは、多少なりとも彼への恩返しになったと密かに思っている。この六月歌舞伎のチケットは既入手したものの、観劇後腹藏なく語り合える友人を失ったことに物足りなさが残ることは確かであろう。

昨年春、彼は請われて北九州ソレイユホール館長として、七十三歳を過ぎ敢えて苦難の道を選び九州に再来した。再び交流が出来ることを楽しみにしていた矢先、十月開館を目前に突然の病魔に襲われ、治療の暇もなく逝ってしまった。日頃元氣であった彼だけに四ヶ月を過ぎた今でもその死が信じがたい。ご冥福を祈ります。

(2011.5.1 寄稿)

## 元氣だった戦時の六中

国立有明高専名誉教授

### 樋口大成(中17回)

私は一九三八年(昭和十三年)、日中戦争が始まった翌年入学しました。当時柔道は正課でした。はじめてひとクラスで道場に入ると、チョビ髭のよく似合う豊類の大男が、柔道着で突っ立っていました。佐々木孝吾先生です。柔道の解説があつてから先生は突然立ち上がると、腹の底から「ベンセイシユクシユクヨルカワヲワタル」ヘーッ、でかい声。私は道場爆発か、と驚いたとき、一友人が「チベット語ですか？」先生はチョビ髭を崩して哄笑しました。

頼山陽の『川中島』です。「鞭声肅々夜河を渡る。暁に見る千兵の大河を擁するを」と続けられました。そして詩集を配られ、四月の柔道の時間の半分は、この詩についての各自のイメージ

(心に絵を描く)の発表ごっこをさせられました。

五月は乃木希典陸軍大将の詩『二〇三』「征馬進まず、人語らず・・・」大勝利にまつわる悲哀。これらのイメージ作りは、今思えばみごとな教育です。人の、そして文化の発展の基礎だと思えます。

三年生のときの定期試験で、学友Sがカンニングを見つかりました。規則では退学。次の休み時間に、百目鬼清(朝陽会本部役員歴多し)が教壇に駆け上がり、「次の試験は全員でカンニングするぞ。学校は一学級全員を退学にするか、皆救われるかの賭けになる」私もそうですが、皆ショックでした。退学になったら・・・無情の鐘がなりました。ぼつぼつ行動開始。とうとう全員が廊下に出され、監督の先生は右往左往。教官会議の決定で、処罰として柔道場まわし。そこには、佐々木先生の後任の怖い小滝チンパンジー先生が待っていて、先生を取り巻いて、一時間正座、黙想。先生が突然沈黙を破る力声「テンノーヒーカニモースワケネエー」先生は泣いていたのです。ひとりが「ブーッ」と吹き出すと、先生は激怒。「ナヌガオカスィー」と立ち上がり、私たちをひとりずつ頭の上

に抱え、道場に次々と投げ出しました。足が痺れていたのに、私たちはひとりとして骨折することなく、さすがと思ふと同時に、空中を四く五メートル飛ぶ体験を今も忘れません。これで一件落着きました。

五年生になった一九四二年は、太平

洋戦争もミッドウェー海戦で日本が大敗北となった時代でしたが、小柄なおじさんの修身(忠君愛国教育)科の

林田先生が新しく就任されました。その挨拶です。「君たちも卒業したら吉原に行くだろうが、いいかね、線香(一

五分)で買ってはいけない。決して女郎だ、売春婦だと軽蔑してはいけない。

一夜を通して話を聞きなさい。貧乏な家庭というだけだ。皆人間なんだよ。」

爆撃だ、玉砕だという言葉の洪水の世の中で、久しぶりに聞いた珠玉のようなお話でした。六中でよかった、としみじみ思いました。

(2011-5-13 寄稿)

### 日本を考える時

西日本鉄道(株)広報室

#### 宮崎俊朗(新20回)

日本は世界との交流で幾多の困難を乗り越えてきた。元寇に始まり、黒船開国、第二次大戦での敗北と国家存亡の危機に見舞われながら、国民の総力を挙げて新しい体制を築いてきた。危機の前には行き過ぎ、驕り、慢心が広がっていた。想定外というお決まりの言葉で総括しようとするが、危うい

想定を拒み退ける傾向が強かった。今回の東日本大震災は、戦後の経済主導體制に痛撃を与えた。元々、工場の海外移転、少子高齢化、格差の拡大と問題は増加の一途であった。中でも東京の一極集中、その裏返しとしての地方の過疎化、衰退が進み、福島県は

1ワットも送られて来ない東京電力の原子力発電所を誘致、稼働することになった。

現代は何でもかんでも電氣を使う便利な社会になった。国民は電氣の恩恵に預かり、欲しいがままにつかう。

大学の先生たちも原発の危険性を知りながら、賛成に流れる。真つ向から反対すれば、大学の職を追われる恐れがあるからだ。

以上に挙げた問題点が全て悪かったわけではない。ただ性急に効率と利益を重んずるあまり、視野が狭くなり

「自分たちの今さえ良ければ」という風潮に陥っていたのではないか。こう

言う私も国民の一人である。今までのことを反省しながら、いかに建て直すかを知恵と汗をだして、謙虚かつ元気に

考え実行したいと思う。当面は避難者の援助、原発の復旧、増税などが課題だが、大きな視点での国家体制づくりに

国民一人一人が力を尽くすべきだ。小手先だけでは、玄海原発や社会保障問題、赤字国債と言った大津波が

続々と押し寄せてくる。

(2011-5-17 寄稿)

### 私は戦中生まれ

#### 岡本稔(新14回)

私の誕生日は昭和十八年七月二七日で一応戦中生まれです。まさに戦雲急を告げる時期で、将来の戦争要員として生めや増やせの国策で、長兄とは十六歳違いで生を受けました。真偽は

あやしいですが同じ村には十一人出産し天皇陛下の表彰を受けた女性がいると聞かされました。終戦後は都会では大変な食糧難で私の妻は博多っ子で、義母から食料確保に難渋した苦

労話を聞かされました。しかし私は愛媛県の田舎育ちで、兼業農家だったため幸いに食料不足の経験はなく、毎日

白米で育ちました。

戦後の日本は日本人の特性である勤勉さと、昭和二十五年に勃発した朝鮮戦争の特需にも恵まれ奇跡的に急速な復興をとげました。さらに昭和三十五年にスタートした池田内閣の所得倍増計画も予想以上に成功し、一億

総中流時代と言われた時代を迎えた。私たち十四回生はまさに戦後の高度成長時代に新宿高校に学びました。昭和四十二年に東大の機械工学部を卒業した時、工学系の就職は完全な売り手市場で、学生間の調整で就職先を決めて

いました。当時は重厚長大企業の人気が高く、鉄は国家なり、鉄は産業の米などと言われており、給与も高かった八幡製鉄(株)に入社しました。しかし技術革新の速度は速く、数年後には重厚長大企業は厳しい経営環境に陥り、鉄冷えなどと言われ、産業の米は

ICに取って代わられました。

何時の時代も大半の学生は就職時期の人気企業を希望します。私の現役期間と同じ四十二年後には日本を支える基幹産業はどんな技術が基盤になっているのでしょうか。

(2011-5-26 寄稿)

### 東日本大震災

#### 特に原発事故に思う

#### 宮澤信雄(新6回)

新宿高校一年の時だったと思う、英語の副読本でラフカディオ・ハーン

の文章を読んで「津波」が世界共通語であることを知りました。小学校教科書には同じ話が「稲村の火」として載っていました。ことほど左様に大地震・

大津波はこの国の宿命です。とはいえ、あの日あのとときに起こった東日本大震災がこれほどの惨禍をもたらすとは、・・・言葉ありません。

しかし、それによって引き起こされた福島第一原発の事故については、言わねばならぬ事があります。先述したように、大地震・大津波の発生が「想定内」の事である以上、海沿いに原発を建て連ねるのは正気の沙汰ではない。極論と聞こえるかもしれない僕の持論の基を順不同で述べれば・・・

いったん事故が起きたら取り返しのつかない事態を招来するようなこと(現に進行中です)は、最初からしてはならないのです。まして、安全についての考え方、リスクに直面したときの組織とそれに属している個人の責任の取り方などに鑑みて、日本人には原子力を扱う資格が最初から欠けているのです。「それでも日本人は原子力を選んだ」のです。

地球上に天然自然には存在しない危険な物質を作り出し、放出すること

自体が、全生命体にとって「想定外」のことなのです。僕が四十年余り関わり続けている水俣病事件、それを引き起こしたメチル水銀もそうですが、核分裂によって生み出される放射性物質は、生命の進化史上なかったものですから、生命体には防御機構が備わっていないのです。

福島原発から放出された放射性物質の影響について、当初日本とニューヨークを往復して浴びる放射線量を引き合いに出して、直ちに健康には影響がないなどと言われた。その愚かしさは評する言葉もありません。ヨウ素131であれ、セシウム134・137であれ、ましてプルトニウムなど、天然自然には存在しない放射性物質が放出されること自体が由々しいことと考えねばならないのです。

僕は神を信じていませんが、もし神的存在があるとしたら、人類のありようを、あるいはこの事態をどう見ているだろうかと思像することはできません。そのお方は「核分裂などという想定外のことを使ってまで欲望を充足させたいか、それは滅びへの道ではないか」と言っているように思えてならないのです。

もし人類が、いやさしあたりこの国がと言っておきましょう、今後も存続した方がよいと考えるなら、生活の利便性を抑えてでも、身の程を弁えた生き方を追求しなければと思うのです。

(2011-5-28 寄稿)

## この大震災に思う

小山春美(新25回)

三月十一日、私は初体験となった二十四時間ホルダー心電図をはずして向かった。その近所で、頭皮の状態で健康状態がわかるという、これもおもしろい初体験を終え頭がすっきりしたところへ、あの異様に長いゆれにみまわれた。ゆれている間、福岡で体験した地震と規模自体は変わらないように感じた。やはり東京では震度5強であった。そして、昨夜(五月三日)のクローズアップ現代にあった徒歩帰宅者のひとりとなり、渋谷から明治通り、新宿から荻窪へと青梅街道をふるえながら(真冬並み以上の寒い夜だった)友人が持たせてくれた水とクッキーを手に、約四時間ひたすら歩いて帰宅できたのは二十二時を過ぎていた。今になって、母校は備蓄の整った避難所であること、徒歩帰宅の危険性などを知ったわけである。

そして、あの津波の映像と、原発事故の様相が頭から離れない毎日が今も続いている。当初、私だけでなく若い世代も、想像の域はでないが、この状況をあの大戦後と比較して心を奮い立たせたと聞いた。戦争は二十世紀の忘れてはならない出来事、この震災は二十一世紀のそれになった。世界の人々と同様に、日本は復興できると信じている。

そのために、ひとつは、国の舵取りを担う人々の叡智の程と、団結して真摯な努力が同じ方向に向かうことだと思ふ。原発の見直しも立たない今、選挙、不信任云々にはだれもが辟易であろう。そして、こんな状況は、日本に心を寄せてくださる世界中に対して赤面するばかりである。ふたつめは、原発の危機的状況の収束と今後のエネルギー問題の道筋への英断であると思ふ。現場で作業に当たっている方々に対しては、どうぞご無事でと敬服の念を持って祈ることしかできない。

それにつけても、ひとたび事故が起きたら、真の安定安心を得るまでに気の遠くなるほどの年月を要し、これほど多くの人の生活や命まで危険にさらし、交付金という名のお金で人を釣らなければならぬようなことに、それに勝る大義名分があるのだろうか。原爆被害国として、地震多発国土を母国に持つ国民として、子孫のために何が最良かを考えたい。最後に、国民一人一人が、今までに比べて、少しずつの不便を東北の方々に思いをはせて受け入れ、日常の中で出来る応援を続けていくことだと思ふ。

数年前に亡くなった素敵な女優さんが出ていた「すこし愛して、ながく愛して」のコマーシャルではないが、一人の小さな手も一日の小さな歩みも、いつしか大きな実を結ぶように、微力ではあるが、「小さな手」であり続けたいと思ふ。

(2011-5-31 寄稿)

## 自己紹介

小代伸博(中21回)



私は、旧制六中に入学しましたが、震災に遭い父母の故郷である熊本の中学校、済々黌に転校、再び震災に遭うなど、波乱の青春をすごしました。

昨年、偶然の出会いがあり、九州朝陽会に入会させていただき、老若男女メンバーの方々との交流ができるようになりました。ご縁を心より感謝申し上げます。戦中、戦後の欠乏の時代に、多感な時を過ごし、毎日を生きていくことに精いっぱい、何の考えもなく過ごしてきたため、何事もすぐ実行するという構えでまいりました。今の世代の人たちは、客観的に物事を観察、評価する余裕があり、いわば評論家的な存在が多いように思われます。後期高齢者(私は末期高齢者)何事も面倒に、保守的になってきていますが、若い方々に期待し、輝かしい未来を願ってやみません。最後になりましたが、三月十一日東日本大震災に被災された方々のお見舞いと復興を心よりお祈りいたしますとともに、出来る限りの応援をしたい所存です。

(2011-5-31 寄稿)

## 幹事長追記

小代さんは、六中は卒業されておりませんが、同期生の卒業年度、中21回（昭和二十三年三月卒）と表記させていただきますました。文中にあるとおり、多感な、そして戦中の多難な時の大半を過ごした六中への想いが一入で、石井会長とのご縁で九州朝陽会への入会を希望されました。昨年の総会から、「忘年会」「花見の宴」と全て参加されています。因みに同期生には元日本共産党中央委員会議長不破哲三氏がおられます。

## 終戦前後の思い出

### 川辺正行（新2回）

#### ① 宣戦布告（小学校四年時の作文）

手元に、日焼けし古ぼけた、わら半紙百七十頁の「文集」がある。昭和十七年（1942年）十二月、太平洋戦争開始後一年目の作文集である。小学校（国民学校）のクラスメイト全員が、二つずつ書いている。この作文を書いた当時、私は小学校四年であった。

忘れられない十二月八日、「帝国陸海軍は、今八日未明西太平洋において、米英軍と戦闘状態に入れり」といふニュース第一報を本校校庭で聞いた。「さあ、いよいよ戦争だ」と思ふと胸がわき立って体が引きしまるよう感じた。矢つぎ早に「海鷲ホノルル大爆撃」「マレー半島に上陸」「シンガポールも爆撃」といふ愉快なニュースで

ある。皆が思わず知らず大歓声を上げた。家へ帰ってみると、ラヂオのスイッチは入れたまゝであった。又々愉快的なニュースである。世界地図は壁に貼られた。お父さんと一しょに「ここがハワイだ」「ここがシンガポールだ」と、敵の重要拠点をしらべた。

夜は宣戦の大詔を拝聴した。「天祐を保有し・・・」と詔書が奉読される。聞いてなんとなく頭の下がるのを感じた。今日は寝るまでどうしても胸がおさまらなかつた。

九日は朝早く起きて、家中で六時のニュースを待った。帝国陸海軍の痛快な戦果が発表された。「米太平洋艦隊正に全滅」思わず万歳を叫んだ。帝国陸海軍の威力、特に海鷲の勇敢さは世界一だ。

「日本はきっと勝つ。神様のお造りになった国だ。きっと勝つ。」と思つた。常に訓練を怠らず、いざといふ時日本を守ってくださる陸海軍の兵隊さんに感謝をしなければならぬ。僕は喜んでばかり居てはいけぬ。もう十年たてば僕らの番だ。今から文武に励み、心身の鍛練をしておかねばならぬ。さあがんばろう。（仮名遣い原文のまま）

#### ② 戦時中の中学生活

昭和十九年四月府立六中に入學、校内に上級生がいないのにビックリした。二年生からは、すべて軍需工場に「学徒動員」され、兵器の製作に励んで、一週に一日だけ勉強をしに学校へ

戻ってくる。校内では一年生が羽根を伸ばし、上級生が遠慮がちに見えて、下級生いじめなど起こる雰囲気ではなかつた。

翌年（昭和二十年）三月十日、「陸軍記念日」の日、陸軍の配属将校等は、府立四中・府立六中の一年生合同の「夜間行軍」を計画した。四中（戸山高校）の生徒は、学校に集合し出発して西進、六中は多摩川の西、生田に電車で移動してから東進し、未明に多摩川を挿んで両軍が対峙したところで、演習終了となるはずであつた。

ところが、六中の一年生三〇〇名近くが、生田駅付近で行軍前の小休止をとっている時、東の空が赤く燃え上がつた。米軍のB29による広範囲の焼夷弾攻撃で、東京の下町が全滅したその炎であつた。この爆撃で、われわれのクラスメイトのなかには親を亡くした人もいた。四中側の生徒も夜間行軍どころではなく、夜間行軍は中止となつた。

翌日、夜が明けて東京に戻つたわれわれの前に開けたのは、焼け焦げたビル以外何も残っていない一面焼野が原の東京であつた。東京の都心から「富士山」がくっきりと見え、思いがけない景觀の変化に驚いた。どうとう我々にも「焼け跡片付け」の勤労働員が課せられた。六中から歩いて行ける四谷付近の焼け跡で、鉄くず拾ひ、跡片付け、整地などの仕事である。夏に向かつてやたらと暑い毎日であつた。広島、長崎に原子爆弾が落とされ、敗戦の色が日増しに濃くなって、昭和

二十年八月十五日を迎えた。無風、晴天の暑い日、昨日まで激しかった戦闘機の騒音がびたりと鳴り止んだ「沈黙の日」であつた。

六中の生徒は学校に召集された。二階の講堂で、今後の見通しと生徒としての心構えについて、校長先生の話を聞くことになつた。

校長先生は、同じ敗戦国のドイツと日本を比較して、次のように述べた。「ドイツと日本の相違点は、国政・外交において、偏つた哲学・思想があるかどうかということ。ナチスドイツには、ユダヤ人排斥の偏つた思想があるが、日本にはそれが無い。また日本の宗教は偏つた思想に支配されていない」といった趣旨のことではなかつたかと思う。従つて、占領軍から厳しい思想統制を科せられることはないだろう・・・だから伸び伸びと頑張れと激励された。

#### ③ 戦後の成長

敗戦直後、私たちは、腹が減つていたが、落ち込むこともなく、伸び伸びと好きな活動に取り組み始めた。私は天文部に入って、屋上にある10インチ赤道儀を覗いたり、太陽の黒点のスケッチをしたり、変光星の観測をしたりしていた。ちょうど在学中に日食があり、張り切つて観測していると朝日新聞の取材を受け、写真が次の日の紙面を飾ることになった。

屋上の望遠鏡は水平以下に向けてはいけぬ・・・という不文律がある。

それは学校の隣に中学生の見ては  
けないものがあつたからである。しか  
し或る時、下向きではないが地上の景  
色（伊勢丹）を見ていたら、おかしな  
ことに気がついた。伊勢丹の屋上に進  
駐軍が掲げている星条旗が「正立像」  
に見える。天体望遠鏡で地上を見ると  
倒立像が見える筈である。肉眼で見  
たら、米兵が間違えて上下逆様に国旗  
を掲揚していた。

当時は学校の名前がよく変わった。  
小学校の時すでに、小学校から国民学  
校に、中学は、東京都立第六中に入學し  
たが、東京都立第六中学校、東京都立  
第六新制高等学校、東京都立新宿高等  
学校と目まぐるしく変わった。

しかし、残念ながら「男女共学」は  
なかなか実現しなかった。私に限って  
言えば、小学校は一学年に男子二組、  
女子一組で「男女別学」、中学・高校  
とも多くの男女別校（中学校・女学校）、  
おまけに大学も工学部で男子ばかり、  
就職先が鉄鋼業で、これも現場は男の  
世界。「男女共学」に憧れる学生時代  
であった。学園祭では、二回ほど「女  
形」をやらされた。二年生では「修善  
寺物語」の妹役「かえで」三年生では、  
チェホフの「熊」の未亡人役・・・女  
子のいない学校なのではまり役であ  
った。

(2011.6.2 寄稿)

### 「花見の宴」開催記

去る四月二日、昨年に引き続き福岡  
市内大濠公園界隈で花見が開催され

ました。一四号会報でご案内したとお  
り、直前にオープンした新博多駅ビル  
での松形恭知さんの陶芸展示会鑑賞  
も兼ねていたもので、震災による自粛ム  
ードの中、予定通り挙行了しました。



福岡城内大手門の前にて



中華料理店での宴

鹿児島新幹線全通直後の土曜日で賑  
やかな博多駅に集合し、陶芸展を鑑賞  
しました。素朴で実用的、かつ値段も  
手ごろな日常陶器をそれぞれ求め、地  
下鉄で大濠公園に移動し、石井会長の  
案内で、今年はちょっと遅咲きの城内

の花見をしました。世情を反映してか、  
ライトアップ、夜明りの提灯も点灯し  
ていない例年になく寂しい城内でし  
た。中国料理の宴では、やはり震災と  
原発事故が話題の中心で、それぞれ立  
場の違いによる意見の相違が印象に  
残りました。しかし、世代、立場を越  
えたこうした集まりでの議論も意義  
あることは確かでしょう。その意味で、  
今後ともこうした機会を続けて行き  
たいと考えています。今回の参加者は  
十二名でした。

#### 幹事長記

#### 事務局からのお知らせ

#### ・会員動静

昨年の総会時の70名の会員は六月  
末日現在69名(正会員65名、名誉  
会員1名、地域外会員3名)となつて  
います。

#### 退会

鈴木朝夫(中15)

平成22年10月 ご逝去

小坂弘治(新7)

平成23年2月 ご逝去

#### 入会

谷口 博(新21) 北九州市在住

平成23年2月 再入会

#### ・今年度総会

今年度総会は平成23年10月15

日(土曜日)午後4時~7時いつもの

福岡市内天神「福新楼」で開催します。

詳細案内は9月初旬に送付します。多  
数のご参加を期待しています。

#### ・年会費納入のお願い

今年度会費6月末日現在6名の方が  
未納です。未納の方には振込取扱票を  
同封しますので8月末日までに納付  
をお願いいたします。

#### 編集後記

未曾有の震災から三カ月、しかし、  
その二次災害ともいえる福島原発の  
放射能汚染禍の収束は、報道で知るぎ  
り程遠い感否めません。

この号は小坂弘治氏の追悼特集を  
考えていましたが、この世情の急変に、  
会員各位にこの国難ともいふべき事  
態に対する所感を募りましたところ、  
予想外の寄稿があり、その全てを掲載  
したので、十五号は8頁となり寄稿順  
に掲載させていただきました。お寄せ  
いただいた方々には深謝いたします。

なお十四号会報でもお知らせした  
ように、川辺正行(新2回)さんは今  
回のご寄稿を最後に、六月末日に東京  
に転居され残念ながら退会されるこ  
とになりました。これまでの度々のご  
寄稿有難うございました。

編集者 記

#### 【発行元】

九州朝陽会事務局

福岡市若木台1丁目  
20-7

Tel/Fax:0940-43-5545

Mail:kjun612@nifty.com

#### 【編集者】

九州朝陽会 幹事長

小泉 純理

(新7回)



